

子は親の心を知らぬ。母親は清楚とした氣性ではあり、略我が子の眞價も知つて居るから、お安が二十歳過ぎる今日迄に、今度こそは、今度こそはと思つた縁談も一度ならず二度ならず在た。けれど姉嬢のお澄を遣つた時に、我意を張つた許に、少々後悔して居る事も在るし、それや之やて今日迄に成つて来た。父親は世間の多くの親の様に、我が子を買ひ被つて居るといふ譯ではないけれど、其所が情で、二十年も疵なしに育て上げたものを、犬の子か猫の子かの様、夫といつて夫と、恩も報も無い人に呉れてやる事が出来ぬ、まあ、急ぐ事はない、少しでも可い所へ、可い所へと思つて、善い運の來るのを、必ず來る事と信じて、落付拂つて待つて居る。お安は何方かといへば、父親よりは母親の氣質を受け、お安は、お安として居るし、殊に何を爲でも人に遅れをとる様の事は無い生れ故、お友達は皆残らず嫁たのに、自分許取り残されて居るのが、何か意氣地が無い様と厭てならない。處を折柄の申込。今度こそはと内々雀踊して進んで居るのだけれど、さう不着落なく面に表して何する事もされず、一通ならず氣を揉んで居る。もう、意中を明さうか明さうかと思ふけれど、どう

したのか機を取り失つてから、どうしても其事が口に出来ない。茶の間と座敷は東受けて、小縁の端に手摺が在つて、其下は川である。お安は開きから鏡立や櫛箱など取り出して鏡に向つた。暫時凝然と鏡を見詰めて居たが、はらりと湯の様な涙が白い頬を傳つて衿へ膝へ落ちた。直ぐ襦袢の袖で拭つたけれど後から後からと玉の様に溢れる。もう、どうしても口に出してはいは無から、大泣きに泣いて泣いて泣いて了はるか、そして自分心の心が分つて早く事が運ぶかも知れぬ、けれど夫も餘り、いつそ一思ひにいつて了はるか、と思つた所へ母親が入つて来た。柱の手箒を取つて、つさと座敷へ行つて了ふ。暫時してまた入つて来た。「お母様、あれどうしたの？」

「吉田屋さ。」

「お父様が餘り食ひ切が無いから困つて居るんだよ。ほんとに。」

「止すなら止すと早くいつてやらなくつちや先方でも急いでるわね、一體お父様はどういふ氣だらう。」

「家のお父様は仕方がないんだよ。早く決めなくつち

四等 氣樂者

岩代國 須賀川町 服部 貞子

や安心が出来ない、早く決めなくつちや安心が出来無いと平常いつてる癖に、誰か貰ひに來ると、己の家の子を偷みに來たか、騙しに來たかといつた様の風で機嫌が悪くつて……私見た様な奴を何と思つて居るんだらう。親の心つて可笑しいわ。其麼事いふんなら、之から先何といつたつて一生何所へも行かないつてお父様にいつて頂戴。ほんとに厭な人だ。もう、其麼事いふんならどんな所からいつて來たつて行きやしないから……母親は少し驚いて、お安の顔を見て居たが、踵を返し、莞爾として二階へ上つて行つた。父親の謠の聲は止んだ。

思ひ切た事いつて了つてお安は胸が透いた様な氣がして、顔を赤くしたま、銅壺から煮を立つた湯を小さい盥へ汲んで、多い房やかな髪を解いて、念入りに癖直をはじめた。

(評) 今回の應募作は前回に比して全體に實はぬやうだ、一等、二等に選すべき作無きが如き、選者の遺憾之に過ぎない、其中にて比較的佳なるは此篇にて、父と母と娘との心情も相應に巧みに寫されて居る、文章もキビキとして對話も熟したものだ、而し肝心の思想内容が單に人情の一片と云ふぐらゐのものに過ぎぬのが、此篇の價値高からざる所以。

「苦いでしょ」思ひ出したやうに律子は云つた。「え？」と茶箆筒の戸に手を掛けた儘振り向いたわぐりは、何の事やら一寸解せかねたらしい。妊れる人の無意識につくと息を、話の間々に苦しからうと思つて居た律子は、つい今口に出たのであつた。

「い、え」と視線がふくらんだ我帯のあたりに注いで居るのに初めて氣付いたらしく、目許で笑つて茶道具を取り出し乍ら「其麼でもないんですよ、私もねえ、もと腹の大きい人を見るとどんなにか苦しいんだらうと思つてました、其麼でもないものですよ」

「さう」と幽かに顎を引いて、火鉢の周圍を一撫で、火箸の所で止めて其手をかけて、貴女心細かあなくつて、律子は何處までも、自分の心を他人に當はめる。「それ、あ、心細いことは心細いけれども、故郷へは歸り……、たくないし、お祖母さんでも上京するんだとい、い、けれど到底駄目なんだし……と諦めてると云ふやうな口振り、無言つて茶碗を手に乗せて出して

「此家の伯母さんがね、親切にして呉れるんでいくらか心丈夫なんですよ」全く心丈夫なのらしい。歸省して昨日上京つた律子は、届け物かたぐい今日この飯田町の奥に友を尋ねた。祖母なる人の陰心配に、自分の思わくもこき交せて、七月と聞いた友の身の上を、如何する積りか知らずと道々考へて来たのであつたが、来て見れば性分とは云へ案外平氣なもの。さすがに懐しがつて聞く故郷の噂も、大方例の快活な笑ひに値するものばかりであつた。

「何て氣樂な人なんだらう！得だわねえ」と律子は思つた。上京る前の日も、わぐりの家の隠居所に尋ねて、繰り返し頼まれたことや、愚痴ごとを思ひ出した。祖母さんも大へん心配して居らつしやいしましたつけ一多くは言はないで、たゞ思つた。早生れなのでわぐりは律子より一つ多かつたが級は同じかつた。小さい時から無口で心の引立たなかつた律子は親しい友達としては一人もなかつたが、誰にでも直ぐ仲よくなつてまた仲悪くなるわぐりと一度仲よくなつてからは、家の近かつた故もあらうが、不思議に、交りが親しくなつた。二人とも町家並に小學校だ

麗好きな上役の家の二階に住んで居た時も、この陰氣臭い狭苦しい座敷住居にも、尋ねる度に律子はいつも快活なわぐりの笑ひを浴びる。夫は今某商店に通ひ番頭の身の上だとやら。「いゝ柄だこと！赤ちやんのに？」起ちながらふと目に止つた隅に押し遣られてたメレンス友禪を目顔でさしていふ。

「いゝえ、襦袢の袖が切れつちやつたんで、それにでもせうかと思つてねえ、福切れの中にあつたんですよ。さうねえ、子供のもそろ／＼用意しなくちやあならないわねえ」

「何處まで氣樂なんだらう！」律子はまた自分の心にひきくらべた。



送り出して座敷に戻つたわぐりは、竹の皮の八の字になつてる鶯饅頭の黄な色を見て、蓋とつて見た鐵瓶の湯氣の熾なのを見ると、戸口にむけて呟えた聲。「伯母さん居らつしやいなお茶入れますから」

けてよして、一年違ひにわぐりは早く二本松の商家に嫁入つた。二年目の正月に里歸りしたまゝ、一年半ばかり隠居所に暮したわぐりの云ふ所によると、嫁入先の姑は夫の繼母で常々折合が悪るい、殊に自分が嫁つてからは猶更激しかつた。それで夫は今家に居ないと云ふ。姑をよく言はないは勿論のこと。東京に出て某會社の書記の役とかを見付けた夫から手紙を受取る度、わぐりは獨り住みの寂寥さを感じた。淋しさに堪えられなかつた。生れるとから手しほにかけた祖父祖母は、其様な邪見な家にはもうやらぬと云ひ、東京へは猶更やらぬ、暮してゆけるか、其麼弱い躰で如何するのだと、いつかな肯かぬ。わぐりは弟が、時として現る食客待ひに、輪をかけて自分が上京心を募らせた。猶、其頃不幸にも夫に死に分れて家に歸つて居た律子に、輪に輪をかけては居づらがつて、同情心を買つて、そして其同情心で益々己が上京心を確かにした。間もなく弟嫁が決つた。際に、祖父祖母を説きつけてわぐりはついに上京した。また一年後れて裁縫學校に入學した律子が尋ねた時は、早や可なりの東京通になつて居た。狭い乍ら一軒の家を持つて居た時も、子供のない綺

「へい有難う」やう／＼に立膝をおろすと、減り氣味の湯はち／＼ととなり出した。
（評）前回の此人の「一年」に比べて内容の單純なるが飽足らぬ、姪嬢と云ふ事に對する女性の心の動搖、之は女性ならでは描かれぬ、而も人生の大問題だ、折角懸る問題を捉へながら輕々に叙し去つたのが重々しく惜しむべきだ。
藤村あき子
五等
○、ほろろ
本所區外手町六十一番地
田中 久子

綺麗にかへられて、背戸には小さい菊島の如なものさへ出来て居る。氣のせむか阿父様の頬も太つた如だし阿母様の眉も美しく剃られて、凡て家中のものは皆お高にいひしれぬ嬉しさを覺えさせる。是も自分が奉